

『カワウソにだまされた話』

私が、父の生存中に聞いた話です。ある時、父は、千野の畑さんへ祭りの招待を受け、大へんごちそうになり、お酒もだいぶ入っていたようです。泊まっていくようにすすめられたが、父は、それを押し切って帰ることになったそうです。



その時、手みやげにごちそうをもらい、夜の十一時頃、畑さんのところを出て、国下を通り、小学校の方へ向かいました。国下の堀さんのところの橋を渡ったか渡らない中に、なんだか変な気持ちになりました。「たぶんこの道を行くと、小学校の方へ行かれる」と思い、歩いたのだが、行けども行けども小学校の方に出られませんでした。

その当時、電気もない時で、東の方を見ても、西の方を見ても、火の明かりが見えません。気がついてみると、ひざまで水につかって、濡れて冷たくなっていた。どう考えても、先に来たところでした。「へんだなあ。」と思い、座り込んでしまったそうです。

一服しようと、タバコに火をつけると、まるで夢から覚めたような気がしたそうです。そのうちに、夜が、白々と明けてきたので、気をつけてみると、竹やぶの中に座っていたそうです。

「いったい、ここはどこだろう。」と考えましたが、覚えていません。畑さんからもらってきたごちそうを、いつ、どこで落としたかも覚えていなかったそうです。「これは、こんなところにも仕方がない。早く、民家のあるところに出なくては…。」と思い、すたすたと歩いていると、八田の道に出たそうです。「俺は、昨夜一晩中、どこを歩いていたのか、国下まで行ったことは覚えているが…。その後は、全くわからない。」

早朝、家に帰ると、祖母は、「千野に泊まってきたのか。」と尋ねた。カワウソにだまされたとも言われず、返事に困って、草刈りかまを持って草刈りに出かけたそうです。

その後、父は、「お前たちが、もし山へ行って道に迷った時、まず腰をおろして、一服して、平静になってから、次の行動に移れ。」と教えてくれました。

(飯川町 沢多 四郎)